

令和4年度 東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和4年11月30日(水) 開会10時00分 閉会11時30分

2 会 場 東広島市役所本庁舎北館2階201会議室

3 出席者 (構成員)

東広島市長 高垣 廣徳

東広島市教育委員会

教育長 市場 一也

委 員 渡部 和彦 (教育長職務代理者)

委 員 坂越 正樹

委 員 京極 秀樹

委 員 島本 智子

委 員 西村 恵子

(その他の出席者)

学校教育部長 江口 和浩

教育調整監 祭田 学

指導課長 木村 健二

情報教育推進室長 沖 秀治

(事務局関係)

総務部長 上田 祐子

総務部次長兼総務課長 大石 美廣

総務課課長補佐兼行政経営係長 尾崎 修司

行政経営係 主査 松岡 元気

4 議 事 小規模校における今後の教育の展開について

5 内 容

○開 会

○高垣市長あいさつ

○議 事

小規模校における今後の教育の展開について

<高垣市長>

それでは、早速でございますが、議事に入ります。

協議に入る前に、議題につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

本日は、「小規模校における今後の教育の展開について」を議題としております。学校教育においては、児童生徒は、集団の中で、切磋琢磨し、多様な考えに触れ、一人一人の資質を伸ばすことが重要とされており、少子化が進行する中、集団性を確保するため、規模の適正化として、全国的に学校の統廃合が進んでおります。

今後、地域における児童生徒数の減少が見込まれるなか、学校規模を確保するための統廃合に拘ることなく、先端技術の活用などによる柔軟な対応を志向しつつ、小規模校のメリットを生かし、地域振興へと繋がる魅力的な教育を展開していく必要がございます。

このような観点から、中心部の都市化と周辺部の過疎化が同時に進む本市において、今後いかにして、小規模校の利点を生かした教育を展開していくかについて、市長と教育委員会とで意見を交換し、これからの時代の教育のあり方について、方向性を共有すべく、本日の議題とさせていただきました。

議題についての説明は、以上でございます。

<高垣市長>

次に、学校教育部から「小規模校における今後の教育の展開について」の概要について説明をお願いします。

(資料説明：教育調整監)

<高垣市長>

ありがとうございました。議論に入る前に、説明があった資料について、ご質問があれば伺います。(質問無し)

今回この議題でご意見を伺わせていただこうと思いましたが、私は、市長に就任して、5年目になりますが、平成20年に策定された統合基本方針に基づく小学校の統廃合がずっと進んできました。就任してから6校を廃校し、新しく小中一貫校を3校作りました。また、人口増加地域の新しい学校として、龍王小学校を作りました。

本市は、全体として人口が増えている状況でありますけれども、西条と八本松が増加していく一方で、周辺部の過疎化は、拍車がかかっており、都市問題と過疎地問題と両方抱えながら、教育行政も展開しているところです。

その廃校に立ち会ったときに、ものすごく残念な気持ちがありました。学校というものが明治以降に作られてから、本当に重要なインフラであり、そのインフラが、実はその地域からなくなるということで、参加された保護者の方や、そこを学び舎として色々なものを培われたご高齢の方々には、本当に慚愧に堪えない思いの廃校という感じがします。

明治6年の学校令によって小学校が設置されてから、今年で150年になります。その150周年の式典も2校でやらせていただきましたけども、本当に、多くの伝統や文化というものが、学校の中にあるなという感じがしたところです。

例えば、JRも明治以降、全国に路線が敷かれ、人口減少の中で廃止問題が大きくクローズアップされ、重要なインフラだから残すべしという地方の声も強いですが、私は、学校の持つ精神文化に対する影響も大変大きいものがあると思います。

文科省は、小規模校については、教育上の観点から、統廃合を検討する方針で、先ほど参考資料にあったような、小規模校が過小規模校になれば、統廃合の対象ということでこれまで進めてきたわけです。

現状、小規模校が16校あり、うち6学級のもの14校あります。今の状況から見ると人口が減り、近いうちにいずれ過小規模校になります。そうすると、これまでの考え方からいけば、統廃合ということになるわけです。ついこの間、小中一貫校とした福富においても、すでに6学級でありますから、どうするかという、議論も出てくるわけです。

そういう中で、今日の資料の冒頭にコミュニティの再構築という話もありましたが、実はこのコミュニティが崩壊しつつあり、特に学校が無くなった地域の荒廃に拍車がかかっている気がしています。

その意味からすると、これから地域共生社会を目指していく時に、教育的観点と地域振興的観点から、学校をどうしていくかしっかりと考えていく必要があります。幸いに今ICTがものすごく進んできました。特に、コロナ禍において、おそらく数年早まった感があります。子供1人1台のタブレットをすごく早く実現できました。このようなツールが大きく社会を変えるようなものであるということと、学びの変革の中で、個別最適な学び、協働的な学びと合わせて、地域とともに子供を育てていこうという動きが出ています。

そういうことを色々と考えていきますと、6学級未満になったから、直ちに統廃合という議論は少し乱暴な気がします。

今日はそういう意味で、小規模校におけるメリットとデメリット、今の環境変化の中で「こんなこともできるんじゃないか」ということで、教育委員会に資料を整理してもらっていますが、まず、総括的に小規模校について、皆さんどうお考えか、お聞きして、論点が絞られてから、議論をさせていただけたらと思います。

市場教育長いかがでしょうか。

<市場教育長>

先ほど説明があったとおり、本市には小規模校が16校あり、今後の児童の減少に伴って、過少規模校が発生していくと予想されます。そういう意味で、これからは、魅力ある学校づくり、地域を元気にする学校づくりが、本当に求められると思います。

特に小規模校は16校と多いので、大規模校へと小規模校の成果を波及させ、そこも元気するというところまでも求められると思います。

そのために、今ある小規模校のメリットを最大化し、今、進展しているICTの環境づくりを進め、そして、再来年度までに全市的に設置されるコミュニティ・スクールを、しっか

り活用しながら、教育行政を展開していく必要があると思っています。

先日、市内で最初にコミュニティ・スクールを設置した風早小学校に行って参りました。設置してから随分経ちますけども、行ってみると、地域のネットワークがゆるやかに広がっていました。また、小学校と高等学校で何か地域のためにできないかとか、地域貢献に関わる取組みを進められていました。コミュニティ・スクールは、すぐに成果が出るものではありませんが、地域課題を解決するための一つの手段として、非常に大きな意義があるかと思っています。

そういう意味では、学校と地域がこれからさらに一体となって、小規模校の教育を創っていく、そこから本市の教育の良さというか、伝統ある地域と一体となった学校というのを、さらに継承していけばいいのかなと考えております。

<高垣市長>

ありがとうございました。では、渡部委員、お願いします。

<渡部委員>

市長からの説明は、全くその通りだと思います。

地域と学校の関係は随分昔から続いていて、地域の長老は、みんな地元の小学校の卒業生という実態があります。そういう方たちは、学校が無くなることで大変なショックだったと思います。例えば、ウォーキングの会などで、西志和地域に行って、学校の跡地前を通ることがあるのですが、学校の周辺やグラウンドには誰もおらず、ガランとしていて、やはり学校の存在は大きいものだと思います。

学校を取るのか、地域を取るのかではなくて、その両立を考えなくてはなりません。資料1ページの小規模校のメリットとデメリットについて、学校運営面では先生方の負担などがありますが、一例として安芸津では、地域づくり協力隊の方が、子供達の夏休みとかを利用して、大変立派なモデル的な活動をして支援しておられます。それをもう少し組織的に考える必要があると思います。

先日、長崎で、市町村教育委員会研究協議会に出席しましたが、全国どこでも大きな問題となっていますが、地域の力をいかに学校と結びつけて、温存し発展させていくかについて、具体的な取組みの報告があつて大変参考になりました。そのような活動を見ても、本市でも、工夫すればやれることが随分あることもよくわかりました。

地域そのものが無くなりつつあるなかで、一つの方法として、祭りとか盆踊りとかを何とか頑張ろうと思って小さいながらも色々やっておられます。さらに、日々の生活の中で皆さんが活動できるものも必要です。例えば、私どもウォーキングの会では、定期的に旧町の地域を回って、誰でも参加できる活動をしています。

それから今、地域の問題としては、高齢者問題が大きいわけですがけれども、福祉の活動として、通いの場ということで、地域の人たちの健康づくりなどに健康福祉部でも取り組んでおります。そういうところで、皆さんが集まり、フレイルにならない活動に取り組んでおりますが、そういうことも含めて、地域の学校の課題というのは、まさに地域の課題、本市の

大きな課題ですので、具体的にどのように詰めていくかについて、細かいことでも、個々のものを組織化して、支援する方法を考えていくことが、大切だと思っています。

<高垣市長>

ありがとうございました。それでは、坂越委員、お願いします。

<坂越委員>

最初に市長の思いをお話いただき、ありがとうございました。よくわかりました。

資料に小規模校のメリットとデメリットが書いてありますが、基本的にメリットとデメリットとは、裏表で、例えば、“すごく親密な関係になる”ことは、“関係が固定化する”ということにもなりますから、そのメリットを最大限に、デメリットを最小限にするにはどうすればいいかというスタンスになると思います。

各論になるかもしれませんが、メリットを生かす方法として、イェナプランというものもあります。福山市でもやっていますが、学年の壁を低くして、異学年で交流しながら、自由進度で学んでいく学習ですが、少人数だと比較的やりやすく、クラスが多いと先生も大変になる面があるので、市場教育長が言われたように、小規模校でパイロット的な教育改革をやってみて、それを展開するというような面でメリットがあるかと思っています。

あとは、最近の教育改革で克服しなければならないのは、教科専任の授業です。小学校5・6年生になり、算数や理科などを教科専門の先生が担当して、より高度な内容にすることになりますと、小規模校で担任が張り付いていると授業をまわしていくことは難しい。それをどうやって克服するかについて、学校が連携したり、他の学校と協働したり、ICTで繋いでいくなど、実施可能な方法を考えることが、デメリットを少なくすることかと思っています。

小規模校では、そこで個別最適な学びをやりながらICTを活用した協働的な学習も可能なのですが、やはり対面の協働的な学びというのも工夫しながら、連携校を作って、ある時には、隣の学校で協働学習するとかみtainなことも必要だろうと思います。

市長が言われた、地域振興と教育的な視点とは、どちらも大事だと思っていますが、この話を進めていく上で、私自身も気を付けなければと思っていることとして、言い過ぎかもしれませんが、地域のシニア世代の人たちの思いと、学校に子供を通わせている保護者の思いにズレが生じる場合があり得るかと思っています。ですから、実際に子供を通わせる保護者たちによくよく理解をしてもらった上で、小規模校の地域特性という特長を打ち出すという、配慮が必要かと思いました。

<高垣市長>

ありがとうございます。それでは、京極委員、お願いします。

<京極委員>

先の方々も言われたように、本当に難しい問題だと思います。やはり小規模校のメリットを最大化し、デメリットを最小化することが大事だと思います。そうした時、学校にかかわ

るコミュニティの範囲をどうするのか、地域だけにするのか、或いは東広島市全体にするのかということがあります。渡部委員がおっしゃった組織化について、教育委員会だけではなく、市としてサポートする組織が最終的には必要だと思います。東広島市には本当にすごい資産ある気がしますし、だからこそコミュニティの部分で特長を出していく。そのためには、コミュニティとして、自然の中で広く体験するなどの地域との連携に加えて、ここには企業もたくさんあるので、その視点も取り入れた形で教育をしていくことも、すごく大事ではないかと思います。

ある面では競わせることも必要ですが、競わせるためには、外の情報もたくさん入れないといけないので、坂越委員がおっしゃったように、学校同士の連携もあるでしょうし、やはり企業の視点も取り入れてやっていく必要があると思います。志和で私は、都度関わらせていただいている活動がありますが、一緒に活動している企業も、教育へ企業の視点を取り入れることについて、「協力しますよ」と言われているわけです。それを支援する体制づくりは、先生だけでは絶対にできないので、教育委員会、或いは東広島市として作っていただくなど、サポート体制がすごく大事になる気がしました。

そうすると、各地に特長ある教育体制ができていくのではないかと思います。なかなか難しいかもしれませんが、少なくともそのような画を描いておく必要があると思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。それでは、島本委員、お願いします。

<島本委員>

実は、私自身が複式学級で授業を受けた経験があります。大和町に福田分校という学校があり、4年生までそこに通って、5年生から神田小学校という本校に通うという学校でした。そこでは、1・2年生が複式学級で、おなご先生ということで、初任の女性の先生がおられて、3・4年生になると男の先生に習って、私は女の子ばかり5人で、そんな学校でした。教師を経験してから、そのころのことを振り返った時、あのころがすごく寂しかったとか、小規模校なので不利なことがあったとか、そういう意識は全く無かったですし、どこか家で牛が生まれたとなれば、みんなでそこへ絵を描きに行ったり、鶏やらウサギやらを飼ったりとか、今の総合的な学習の時間のようなことをすでにやっていたのだなと思います。

家から出かけるときには、「人に会うたら挨拶するんよ」と言われ、地域の人がいつも気にかけてくれて、大切にされ、愛されていたんだと、大人になって思うことが沢山あります。

このことが話題になりますと“どこで学んだか”というより“何を学んだか”ということが、やはり、将来生きる力になるのではないかと思います。『二十四の瞳』を観た時に、教師になりたいと思ったのは、やはり自分の実体験と重なったのかなと思うところです。

小規模校というと、どうしてもなんとなく暗いイメージになるのですが、大勢の、みんな“では”できないけど、みんな“が”できることはたくさんあります。と言うのは、誰かが怠けていてはできないので、一人一人に役割があります。発表会ともなると、一人で何役もやることになり、主役をする場面もたくさんありますので、そういう意味では、みんな“で

は”できないけど、みんな“が”できることはたくさんあると思います。

ですが、これは昭和の時代の話ですので、今の時代に合わせていきますと、コミュニティ・スクールや総合的な学習の時間をして、全国どこも金太郎飴のように、お米づくりをしたり、野菜を作ったりを大規模校も小規模校でも同じくやっているところですよ。“今こそ小規模校が！”となると、京極委員がおっしゃったように企業を入れたりして、一例ですけど、山の葉っぱを集めて腐葉土を作って、売って、お金にして、貯めてそれでみんなで何かをしようとか、そういう、今までタブーだったお金を教育に入れるというようなことも、子供らが社会に出たときの金銭教育とか、そういうものをどんどん入れていけるような企画をすれば、特色も出るかと思いました。

先ほど坂越委員がおっしゃったのですが、今、こうして大人が小規模校を何かと論じていますが、実際、子供達は どう思っているのか。小規模校とされている学校の子供の声を聞くべきだと思います。あとやはり、地域の高齢の方は、“オラが学校・私の学校”ということで、反対の方も多と思うのですが、今のお母さん方にとっては、子育てと小規模校の教育とを繋げて考えないといけないと思います。大規模校でちょっとしんどかったとか、小規模校でやっていることを本当に理解して、子育てと合わせていかないと、なかなか前には進まないと思います。

そのためには、空き家を利用したりとか、企業や働く場を作ったりという、教育委員会だけではできない事も含めた支援をしていかないと、子供が小規模校へと動いていかないのではないかと、思いました。

<高垣市長>

ありがとうございました。それでは西村委員お願いします。

<西村委員>

市場教育長や各委員のご発言を、頷きながら聞いていました。

保護者としての立場からすると、やはり学校が無くなることは、子供にとっても保護者にとっても、地域にとっても、とても寂しいことです。高垣市長が言われたような思いがあることに関して、先日、河内小学校のPTA会長から、「自分の子供はどんどん統廃合が進んで、6年間で校歌が3回変わりました」という話を聞きました。校歌が変わると、「みんなが唄っている歌は、来年から別の歌を唄ってください」と言われることが、子供にどんな思いをさせるのかと想像した時、心が切なくなりました。やっぱり校歌はオンリーワンであって欲しいなというのが正直なところですが、統廃合によって、小さなことも含め色々なところで、子供や保護者、地域、先生方に影響していると思いました。

小規模校における教育という観点では、ICTを活用した学習がこれからどんどん取り入れられて、大規模校でも小規模校でも同じ学習ができる環境になっていくと思います。

「タブーかもしれませんが」と、島本委員が前置きでおっしゃいましたが、やはり企業や、その他の力を教育の現場に入れるということが、これからは必要になってくると私も感じています。小規模であろうと大規模校であろうと、教育は子供や保護者がどういった教育を受

けていきたいかという子供発信です。そして、大人たちが考え、子供、その先輩、中学生、高校生、そして大人、というふうに、子供を中心に広がっていく教育というものを、これからは考えていく時代であると思っています。

そのように考えるには根拠がありまして、学習内容に関しては、私たち保護者が受けた教育と比べて、今の子供たちは格段にいろいろな知識を勉強しているという実感があり、子供たちは経験が無いだけだと常に思っています。学習面では、ICTなどを活用して、小規模校でも同じものが学習できるので、子供に経験をさせ、そこから社会を学ぶ社会教育や、保護者も一緒になって学ぶ家庭教育などを、教育現場で拾っていくことがキーワードになるかと思っています。

それと、小学校区で住民自治協議会がありますが、市全体に小規模校が多くなってくると、小学校区単位で何かをすることが難しいという状況が生じてくると思います。そういった時に、中学校区という考え方も、将来的には、いろいろな面で必要になってくるのではないかと思っています。

と言いますのは、中学校へは複数の小学校から子供が通いますので、これからの東広島の教育に、中学校というキーワードとか、中学校区でできる活動も視野に入れることも、地域と学校を繋ぐものとして、私たち世代が考えていくべき課題だと思っています。

<高垣市長>

ありがとうございました。皆さんから一通りお話を聞く中で、我々が整理しているメリットとデメリットについて、これまでに無いようなご指摘も少しいただきました。

坂越委員がおっしゃったように、メリットとデメリットはまさに裏腹でありますから、アプローチの仕方とすると、メリットを生かしつつ、デメリットをどう解消するのか。色々なツールや制度が整う中で、デメリットの克服もできそうな感じがしたところです。

そういう中でコミュニティ・スクールの話であるとか、コミュニティをどう考えるかというお話がありましたので、市の考え方をちょっとお話させていただくと、住民自治協議会が、全市に48ありまして、基本的には小学校区が中心になっています。

ただ、豊栄町などではすでに1校にまで小学校は減っていたのですが、従前小学校区であったエリアで設立しています。1町1小学校1中学校になって、西村委員がおっしゃったように中学校区という考え方も出てくる地域もありますし、むしろ、そういうふうに考えなければいけない時代になりつつあることは、事実です。

その中で、なぜ、従前の小学校区を単位としたかという、コミュニティ活動などは、やはり小学校区が基本にあり、もっと小さな町内会や区長の単位がしっかり動き出して初めて小学校区も動くものなので、様々な活動をするときに、基本は小学校区になります。

地域共生社会を築くとき、エリアも非常に大切なのですが、京極委員からもご指摘がありましたけれど、我が市には、大変たくさんの企業が立地していて、企業も共生社会においては、地域を越えて活動ができる一つの同じ考え方を持ったコミュニティみたいなものなので、どう表現したら良いか、地域コミュニティがある一方で、専門家コミュニティのような

ものがあって、そういうものが相まって地域共生社会ができるというのが、今の厚労省の発想ですから、エリアと企業が一体となって地域を活性化するというアプローチですので、学校教育の中にも、企業の発想が大変重要だし、地域を中心としたコミュニティ・スクールはもちろんです、企業支援というものも大変重要なことで、それが、小規模校のデメリットの解消に向けた一つの役割を果たすのではないかという感じがしました。

それともう一つ、資料には書いていませんが、イエナプラン教育については、坂越委員におっしゃっていただきましたが、実は私はイエナプラン教育が一つ大きなデメリットの克服策になるのではないかと思います。島本委員がおっしゃったように、私は、複式教育は決して悪くない感じがしています。我々世代は、『二十四の瞳』を観ていましたので、さきほどおなご先生とかおとこ先生とおっしゃいましたけど、まさにそういう世界が、戦後すぐではありましたが、生きる力を生む教育がその中であつたような気がするのです。映画ではありますけども。私も小学校は、尾道の小学校でしたが、全員で50人ぐらいの学校で、1学年1クラスで、6年生まで、ずっと一緒でした。クラス替えがないがゆえに問題点があるとの指摘もありますが、今でも同級生との集まりの中では、その当時の話が、本当に多く出てくるということもあり、やはり決してそういうことは悪くないと思うのです。

各委員からお話を聞きながら、トータルで見た時に小規模校も必ずしも悪くないという共通のお考えがあるのだらうと思うのです。ただ一方で、デメリットは、これから克服していく必要があり、小規模校をどう運営しているかということ意識しながら、例えば、児童数が6学級を割り込んだとしても、引き続き小学校を残しながら教育を展開することについては、しっかり議論をしておかなければいけない気がします。

それと渡部委員がおっしゃったように、公的施設が無い時代には、学校を中心として地域活動がされていたと思います。体育館と兼用する講堂が学校にあって、そこに色々な映画が来たり、劇団が来たり、地域拠点のように地域をあげて集まる場であつたわけですね。ですからそれがなくなるということが、高齢者の方にとっては、ノスタルジーを感じながら寂しい部分もあります。小学校で、異常な人によって子供たちが傷害を受けるような事件もあり、学校が非常に閉ざされた空間になった時期があつたと思いますが、今コミュニティ・スクールで変わってきていますが、そういう中で、小規模校がしっかり残っている意義を見出せるのではないかという感じがしました。

さて、小規模校のデメリットに対して、資料の項目3において、色々な取組みによって克服できるのではないかという提案があつたのですが、一通りのことは、リストアップされているかとは思いますが、これら以外に何かあれば、ご指摘いただこうと思います。それと、イエナプラン教育の話少し坂越委員から補強していただきたいと思います。

<坂越委員>

私も専門ではないのですが、広島ではイエナプラン教育が最近注目されていて、福山市でも先導的に導入されています。私が見ている限り、完全にイエナプラン教育を導入することは、公立学校では、かなり難しいと思います。

イエナプランは、基本的に個別学習で、一人一人の進度に合わせて、学年も取り払ってし

まって、自分の到達目標を自分で作って、「今日はこの勉強をします。」「今週はこういう形で、自分で勉強します。」ということをしています。一方、協働的な活動の部分についても工夫されていて、上の学年の先輩が下の学年を教えていくような協働学習のチームを作って展開していくというものになります。

今の公立小学校は、35人学級という枠があり、担任がついていて35人の子供の面倒を見るという仕組みになっていますので、直の導入は難しく、やはりどうしてもイエナプランに似た形で、個別進度学習をやっていくということになります。

ただし、小規模校であれば、例えば吉川小学校みたいに、各学年が10人を切っている中では、6人の担任が50人くらいの子供の面倒を見るという仕組みが成り立ちますし、1年生の子が3年生や4年生に教えてもらうという関係は成り立つだろうと思いますので、小規模校の特性は生かせるかなとは思いますが。

<高垣市長>

複式学級は、どちらかというとイエナプラン教育に近いのでしょうか。

<島本委員>

複数の学年が同時に居る点では近いですね。少し話が違いますが、以前、神石高原町を訪問した時、複式の授業のスペシャリストの方がいらっしゃって、すでに退職されていますが、その方の授業を観た時、ここに本当に子供が40人いるのかというぐらい、自分達でどんどん授業を進めていく、本当に主体的な学びをしていて驚きました。イエナとはちょっと違うかなという部分もあるのですが、子供たちが自分たちで進めていました。

そして、そのためには、先生たちへの支援が、たくさん必要になります。私も、以前西条小学校で、平成元年と2年に、ティームティーチングを導入して、今の自由進度とか、課題別学習とかもしました。4つの壁、時間割、教材、地域、学年を取り払って実施しましたが、そのためには、1人加配の先生が確実につく必要があります。定数内の先生だけでやっていると難しいので、人を付けることが必要になります。それと、西条小は、オープンスペースがありましたが、教室の枠以外にも自由に学べるための余裕教室も必要になりますので、やはり箱物もそろえなければいけないと思います。

ただ、福山市のイエナプラン教育は、常石造船が全面的にバックアップしていて、企業とコラボして、色々されていると聞いたことがあります。ただ、宿題も無いとか、テストも無いとか、何か全く自由というふうなことも、少し聞きましたので、全面的な導入はどうかという気持ちもありますが、今の個別最適とイエナプラン教育は繋がりがあると思います。ですから、イエナプラン教育を全面に打ち出して東広島市で実施することは、いかがなものかと思いますが、“イエナのな”、“イエナもどき”は、参考にしてみるのも、面白いと思います。

<坂越委員>

複式学級の例を少し紹介します。

広島大学附属東雲小学校には、複式学級があり、その学級で授業研究をし、展開を図って

いるのですが、実は、複式学級への入学を求める声もあるのです。児童を募集するとき、複式学級の入口を設けて募集をするのですが、ここに一定の数の志望者が集まっています。

複式学級の良さとして、少人数で丁寧に面倒を見てもらえる。そこでは、1年生と2年生が同じ教室に机を並べて教えてもらっていますが、内容は、違うことをやっています。先生は、ある時は板書して2年生と授業していますし、またある時は1年生の指導もしていますが、少人数なので、先生はずっと巡回しながら、一人一人の子供がやっていることが全て分かりますし、経過を重視しながら細かな指導ができることに加えて、プラスアルファとしてサポート教員も加わるので、より手厚い教育が可能になるということなので、ある意味人気がある学級になっているようです。

<高垣市長>

福山市はイェナプラン教育に熱心で、ヨーロッパの方にも視察に行ったりされていました。平川教育長も結構イェナプラン教育に関心があって、一度お話をしたときに、私は、「小規模校に導入すると効果があるんじゃないですか」と質問したところ、「いやそれは市長さん違うんですよ」というご指摘を受けたことがあります。必ずしも小規模校にイェナプラン教育じゃないのだろうと思うのですけども、異年齢の教育の効果という観点からすると多分にあるのだろうと思うのです。

市場教育長が龍王小において、大規模校ですけど、異年齢の教育実践をされましたよね。その視点から、異年齢教育の効果はどうですか。

<市場教育長>

大規模校で、異年齢教育をすると班編成が非常に難しいですね。6年生の数に合わせて班ができますので、120班以上も必要になりましたし、いろいろ配慮が必要な児童もいました。

そういった中でも、6年生は、リーダーとして、遊ぶ時も何かと1年生のことを考えながら、どのような形でまとめていこうかなどと、リーダー性や主体性を発揮していました。当然、低学年は、「あんなお兄さんかっこいいな」とか、憧れであるとか、そういった気持ちを持つようになります。実際、卒業式のお別れの時には、班の子供たちは、お兄さんやお姉さんの卒業を寂しく思いながら見送っていくという、非常にいい関係はできたと思います。

<高垣市長>

一般論として教育投資が、一番投資効果が高いと、色々なところで言われますね。特に幼児教育は、効果が高いと言われますが、小学校に対する投資も結構重要だと思います。

例えば、統廃合すると、必ず新しい校舎を造らないといけない。やはりこれは合意形成上難しい点でして、既存の大きい小学校へ児童を集めて、そこに通ってくださいということにならないのです。ですから、我が市の小中一貫校もすべて新しい投資をしたわけです。

そういう投資をすることが良いのか、人に対する投資をする方が良いのか。おそらく、少人数で運営するとなれば、そこには加配教師がいるのだろうと思います。そういうことを考えたときに、やはり、すぐ学校の統合ということではないのではないかという思いが私には

あります。もう少し、しっかり議論しながらやっていきたいと思っていますところです。渡部委員、複式学級とか異年齢教育について意見ををお願いします。

<渡部委員>

私は地域と学校とをもう少し近づけるために、以前、ミネソタ大学の教育学部を訪問したことがあります。そこで小学校を紹介されました。そこには、非常に広いスペースの部屋があって、絨毯などが敷いてあって、子供はもちろん裸足で、自由に机を移動させて先生と対話したり、寝転んだりするスペースがありました。新しい空間づくりの話もありましたが、その参考になるかなと思いました。もう一つは、その学校には温水プールがあって、その施設を地域の方が利用できるという繋がりもありました。

地域の人で、その学校を支援している人たちは、そういった施設で会合したり、先生方と交流したりしていましたので、話ができるようなスペースは、非常に有効だと思います。

人との繋がり、実際のコミュニティの繋がりということが、大変大事なのだと思います。そういった場は地域の集会場としても使えますので、このように、逆に学校が地域へサービスすることによって、連携を密にすることも、視野に入れていくべきかと思います。

<高垣市長>

学校とは地域の舞台ですから、皆さんが集まる基盤みたいな、まさに地域のインフラですよ。そのような活用の中で、同じ年の子供たちだけの交流じゃなくて、外部から来る方々からの色々な刺激も受けるということになってくるのでしょうか。

<渡部委員>

三ツ城小では、当初から地域の人達に向けたスペースを作っていたのですが、だんだん無くなってしまいました。

<高垣市長>

三ツ城小では、子供たちが増えたので、そういう余裕のスペースが無くなってしまいました。その点、小規模校では、もともとある程度の子供を抱えていたので、施設に余裕があり、提供できる室があるので、様々な活用ができますね。

ですから、地域とともにある学校にし得る空間とキャパシティを持っていることは、メリットですね。施設の調整をしやすいというメリットが、多分にあるのだと思います。

京極委員、企業が関わることも意味があるとのお話しでしたが、複式学級とか異年齢教育とか、そういう点も含めて、何か企業の関わりみたいなことは、どうですか。

<京極委員>

企業と学校の連携については、まず少し例を作った方がいいと思います。子供たちに、企業の目線で話をするとか、企業の取り組みや企業が勉強していることを教えることも必要ですし、企業を見学することも必要ですが、まずそういった連携ができる体制を作っておくこと

が大事かと思えます。これは小規模校でも大規模校でも関係ないと思うのですが、多分、市の資産をうまく使う仕組みができていないのではないのでしょうか。先に言いましたように、企業は、「協力しますよ」と言われていますので、うまい具合に連携できるような仕組みを作る必要があります。

おそらく、学校の先生方では、そこまで立ち入ることができないので、やはり教育委員会とか市が、勉強して協力体制を作ってあげておくことが大事かなと思えます。

<高垣市長>

最近の部活動では、運動部でも文化部でも、地域の方や企業の力も活用しながらやっているという動きにもなっていますし、教育の中身についても、さきほどお話のあった金融のようなことや起業することがどういうものかというようなことを子供たちに教えることは、大変重要になってくると思えます。そういう特長を生かした教育は、小規模校、大規模校に関係なく、我が市には、折角、多くの優良な企業があるわけですから、そういう力を借りることを、やはり本市の特長として生かしていく必要がありますね。

<京極委員>

企業から、どういうことをご協力いただけるかということは、ある程度資料として把握しておくことも大事かと思えます。情報が少ないので、企業のことは意外と分かっていないので、やはり把握しておくべきかと思えます。私は、工学系の企業が頭に浮かびやすいのですが、先ほどお話しがあったような腐葉土作りだとか、そういう企業は、けっこう地域にあるわけで、そういうことは大事です。

(渡部委員退席)

<高垣市長>

最近、SDGsに学校でも色々取り組んでいただいていますけど、SDGsの観点から事業を展開する企業も結構ありますから、そういう点で講師に来ていただいて教えていただければ、実際にどういうところでSDGsが展開されているかということ、子供が知ることができると思えます。

<京極委員>

子供は、少しでも興味を持ったら、その気持ちから“ガーッ”とやりたいと思える。そう思わせたら教育は十分だろうと思えます。なので、興味を持たせる機会が必要だと思います。

ボクシングの入江選手がカエルを研究するため大学院に入学されましたが、これは、すごいニュースだと思いました。何かきっかけになるようなことが、多分、小学校とか中学校の時にあったのではないかと思います。

ですから、子供たちにそのように思わせ、気付きをさせることが大事だと思います。きっかけになるお話は、いろいろあった方が良くと思いますので、そうすると、企業や地域との

連携などには、やはり気付きがいっぱいありますので、そういう場をたくさん作ってあげることが大事かと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。さきほど西村委員から、これからは子供の視点での教育が大変重要であるというお話がありました。

実は昨日、地域づくりの分野で有名な『デフレの正体』とか『里山資本主義』を書かれた藻谷浩介さんの話を聞きました。

その方曰く、言い過ぎかもしれないけれど、受験エリートが、今、我が国を駄目にしていくと。教えられたことを正しいと思い込んで物事を考えており、本当はどうなのかという見地に立脚して現場を見て、そこから出てくる数字を見ながら議論をしていない。これは受験エリートの弊害だと。ご本人も東大ですけど、東大の連中が皆悪いみたいなことを言われたのですが、その方は小学生の頃から、自分で問題意識を持ちながら、全国を行脚されたのです。やはりこれからは、そういう子供の関心というものが大変重要ではないかと、先ほどのお話を聞いて、昨日の話と一致すると思ったのです。

どちらかと言うと、中山間地における小規模校で展開できそうな話だと思いますが、何か子供の立場で、こんな教育だったらいいなという意見をいただけますか。

<西村委員>

子供たちが何をしたいか、何を学びたいかという話を聞いて、「じゃあそれをやってみよう」とか、「先生だけじゃちょっと無理だから他の人の手を借りてやってみよう」とか、そういうチャレンジは、小規模校では、実現しやすいかとも思います。そして、そういった例を、徐々に大規模校へも広げていくことは、とても大事かと思います。

先日、豊栄中の教育研究会にお邪魔させていただいた時、校長先生もいろいろお話をされていたのですが、2年生が6人しかいない小規模校ですが、実は賀茂北高とも連携をとっているという話を聞きました。

ということは、先生は、異動とかで変わりますが、地域の子供たちは、ずっと先輩や後輩たちと繋がっている状況があると感じました。高校の先輩から話を聞いたりした中学生が、こういうことをしてみたいと思う、そして中学生の話を聞いた小学生が、「こういうことしていきいたい」というように、子供同士の“したい学習”とか“したいこと”が子供発信で、いろいろと見つかるのではないかと考えています。

ですから、大人が「こうした方がいいんだろう」とか、「こういったことが役に立つだろう」という考えではなくて、子供たち自身が、いろいろな人たちと交わる中で、疑問に思ったことを学習してみようとする取組みが、経験へ繋がっていくと考えています。

少し今のお話から逸れるかもしれませんが、小規模校では、豊栄中のように、地元の学校と連携できるかと思いますが、大規模の小学校から中学校に進学すると、小学校と中学校の繋がりがというものが、分断されるような気がします。

なので、中学生が小学校でお手伝いできることも検討していただきたいと思います。自分

が卒業した小学校でも他の学校でも良いですけど、中学生の先輩たちが小学生の学習に参加したり、活動に対してお手伝いしたり携わることが、将来的にできると、子供たちが先輩から教えられ、疑問に思ったことを学習してみようという意欲にも作用すると思います。

異年齢教育もそうですが、影響し合うという観点からは、小学校と中学校の分断ということが起きやすい大規模校の課題でもありますし、小規模校の例を大規模校にも取り入れていけたら、それが子供発信に繋がると思っています。

<高垣市長>

実は賀茂北高は、生徒数がかかなり厳しい状況にあって、県の基準では80人を切ったら廃止されるというものがあります。なので、今、地域を挙げてどうするかということを検討しているのですが、やはり小中高一体となって、賀茂北学園的な運営をしていくというサポートを我々もしていかなければと思っています。

実はそういう例が造賀にありました。造賀には、保育所、小学校、中学校、それから、かつて西条農業高がありました。そして、今、造賀学園という取組みをして、非常に地域活動が活発になっています。そこでは、広島市などへ進学した子も含め高校2年生が主体になって、地域の夏祭りを開催していて、小さな子供たちも、先輩から教えられて、一定の役割を果たしていくということをやっています。

小さい学校はそういうこともできるので、これは一つメリットではないかと思いますね。そういう中で、大規模校は、連携にちょっと課題があるという話がありましたが、市場教育長、その点は、どうですか。

<市場教育長>

今、小中接続教育と言って、教員は中学校区内にある関係小学校と、定期的な協議会を開催しながら取り組んでいるところですが、やはり、子供同士の交流は大規模校では、ネットワークがなかなか重たくなります。小規模校なら頻繁に行き来できますが、大規模校となると対象の生徒の規模が違いますので、深くできない部分もあろうかと思っています。ですが、そこは大事に取り組んでいきたいと思っています。

<西村委員>

部活動が地域移行になるなどの問題について、先ほど、中学校区という考え方を言いましたが、同じ中学校に進学する子供達の交流も大切だと思います。子供発信というキーワードからすれば、同じ中学校に進む子供同士が小学校時代から交流をする場があれば、中学校に進んだとき、子供同士がコミュニケーションをとっていけるであろうと思います。昔から言われますが、中学校では、違う小学校同士での派閥ができると。実際には、子供たちは、違う小学校でも、教育とか部活動を一緒にしたりしてコミュニケーションをとって、仲良く協働的な活動をしています。同じ小学校教育を受け、同じICTを使って、同じコンテンツを使って勉強しているのであれば、子供同士のコミュニケーションも、学習と同じようにできるので、現状では、小学校では、クラスの範囲での学習ですけど、クラスの半々をオンラ

インで繋いで、同じ単元を、違う学校同士で意見交換することも、将来的には可能になるのではないかと思います。

<高垣市長>

GIGAスクールになりましたので、いろいろな可能性が生まれてきます。先行事例として、海外とやり取りをして、国際交流を進めるような取組みをしていますけれども、域内でも、おっしゃるような活用の仕方でもできるようになりましたね。

ですから、小中の連携など、西村委員がおっしゃったようなことも、展開できる可能性が出てきましたから、教育委員会で参考にしながら、取り組んでいただければと思います。

そろそろ総括的なまとめをしますが、今日のテーマとしては、我が市には統合基本方針がありますが、過小規模校になれば統廃合をするということは、当然これからも頭に入れて考えていくのですが、今日の議論では、現在の環境は、統合基本方針を作成した平成20年から比べると随分変わってきていると。

そういう中で、この方針を一気に廃止すると、いろいろ課題が出てくるとは思いますが、どのようにこの方針を運用していくべきか、という視点から、ご意見をいただきたいと思うのですが、市場教育長には最後に何うとして、まず坂越委員から、お願いします。

<坂越委員>

施策的なことは、市長や教育長の取組みにおいて、施設の耐久年度であるとか、様々な要素を加味して、検討すべきことが多いと思いますが、基本的に、今日のお話であったように、小規模校におけるメリットは、十分考えられるということが確認できたと思いますし、西村委員が言われたように、今学んでいる子供たちが、一生懸命楽しく学んで、生活できるように取り組むことが、一番大切だと思います。そのために、小規模校のメリットをどうやって生かせるのか、デメリットをいかに減らせるのか、という観点で考えていくことだろうと思います。

話が重なってしまいますが、これだけ色々なシステムやツールが出てきていると、特に小規模校では、いろいろなところと連携ができますし、今日も話がありましたけれども、小規模校の子供たちにとってデメリットだった社会性の育成がなかなか難しいという部分についても、他校と連携することによって交流や情報交換をとおしてカバーすることができます。

教育委員会へのお願いとして、子供たちに刺激を与えるチャンスをできるだけ作って欲しいのです。先日、生涯学習フェスティバルで子供たちの作品を拝見しましたが、ただ展示して賞状を渡すだけではなくて、例えば、あの作品群を巡回展示して、他校の子はこんなすごいことをやっているということを見せてあげるような、そういう、刺激の機会をぜひ仕組んでいただきたいと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。京極委員お願いします。

<京極委員>

小規模校のメリットは、本当にたくさんあると思います。ただし、教員の数が、どうしても制限されます。ですから、学校とすれば、“やりたいけれどできない”ということが現実だと思いますので、それに対して、やはり外の力、コミュニティの力、企業の力も借りながら、実現できるような教育のシステムを作ってあげれば、もっと東広島市として、新しい教育体系のようなものができるのではないかと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。島本委員お願いします。

<島本委員>

今日、いろいろと前向きな発言がありました。これから小規模校が特色を出す方向性としては、大規模校では、自己有用感を持てなかったという子たちが、小さい学校に行ったら、自己存在感や自己有用感が持てるのではないかと。お母さんが子育てする時に、そういう小さい学校に通ったら、この子のそういう能力も、発揮できて、のびのびできるのではないかと。という可能性があります。目に見えることだけではなくて、そういう心の支えとか、支援とかも必要とされていると思います。ですから、カウンセラーがいることを一つの特色として、そういう子たちが行って、そこで、のびのび活動ができればいいなと思いますので、是非そういう視点も取り入れて、専門のカウンセラーがいるようなことも、特色として出していたらありがたいなと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。西村委員、お願いします。

<西村委員>

今、子供が小学校に通っている保護者についての話を聞くと、もう明らかに、平成の時代と違う感覚をお持ちだなということをすごく感じています。そして、さらにその下の世代のデジタルネイティブと言われる方たち、例えば、今、市民協働センターにおられる25・6歳くらいの若い方から話を聞いても、「もう今の高校生や大学生と自分たちは違う」とはっきりおっしゃいます。ですから、これから学校へ子供を通わせて、支えていく若い人たちには、小規模校・大規模校にかかわらず、学校というものを考えていただき、そして私たちもそういった若い人の状況を考えながら、教育を進めていくことが大事だと思っています。

P T Aのあり方についても、昭和の時代から続いていることを、継続してやろうとすると、平成も過ぎて令和となった今では、資料にもP T A活動の保護者の負担が大きいことが記載されていますが、昔は当たり前に行っていたことの形をどんどん変えていかなくてはならないというところに来ているという話が出ています。

ですから、平成20年度に小学校の統合基本方針というのが策定されましたけども、P T A

でも、大体平成 20 年代に決められたこととか、良しとされてきたこととかが、今の保護者やこれから保護者になる世代の方たちには、違和感があることも多いと思っていますので、少しずつでも、できるところで変えていくことが必要です。地域のあり方とか、行政もそうですが、様々な要素を全て含めて考えていく教育が大事になっていくと思います。

<高垣市長>

ありがとうございます。市場教育長、総括してください

<市場教育長>

総括の前に 1 点ほど。少人数だから、教員がついつい教えすぎたりとか、与えすぎたりとか、また構いすぎるといふ、過剰なサービスが、どうしても小規模校にあるような気がします。それは子供たちの自律を阻害してしまうことがあるので、やはりしっかりと自分の頭で考え、そして、行動する主体性だとか、当事者意識を持てるような、関わり方がこれから非常に大切になってくると思います。

最後に、多様な子供たちが多様な学びができる魅力ある学校、また、地域の方、保護者、子供たちが「この学校がいいな」とか、誇りが持てる、そういったものを一緒に作っていくことが、これから求められているところです。いくら小さくても、本当に自慢できる学校になれば、統合とかそういう話は出てこないと思いますし、そういったところを目指して、行政は環境づくりにしっかり取り組むことが、これからの方向性かと思っています。

<高垣市長>

ありがとうございました。大きく時代が変わりつつあるという認識の中で、これからこの方針をどのように運用していくかということが、大前提としてある気がしました。

それと小規模校がゆえに、多様性を実現しうる時代になったということだろうと思います。そうすると、小規模校は小規模校でそれぞれ特長を持たせて、いろいろな選択肢を市民の皆さんに、提供できることも念頭に置きながら、これから小規模校のメリットをさらに生かしデメリットをいかに最小化していくか。そのデメリットの部分では、やはりマンパワーの問題も出てきて、京極委員もおっしゃったように、地域の力、或いは企業の力なども借りながら、あるいは行政自身が手を入れることも、必要かもしれませんが、そういうことも含めて、小規模校のいいところをたくさん今日は見出した気がしますので、デメリットをどう解消していくかということが、我々の仕事だという気がしています。

最後に、地域振興的観点から言うと、できれば、人口がうまく市内全体に広がっていくような、地域を選んでいただけるようにする施策を展開するにあたって、学校はものすごく大きいウェイトを持っていると思います。購買という点では、デリバリーができる時代になりましたから、医療と学校というものが、特にキーになる気がしています。そうすると中山間地域に魅力的な学校を作っていけば、町から地域へ移り住んでくれるのではないかと考えているところです。教育的観点と地域振興の観点から色々な施策を進めたいと考えておりますので、今日は大変有用なご意見をいただきました。ありがとうございました。